

令和 4 年 5 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00653

研究課題名(和文) 古代日本語における述語形式の意味と文の意味の関係に関する原理的・実証的研究

研究課題名(英文) A study on the forms and meanings of the predicate of old Japanese : theoretical and empirical approach

研究代表者

仁科 明 (NISHINA, AKIRA)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：70326122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：具体的な述語形式(推量や広義の希望をあらわす形式)の表わす意味の検討をとおして、述語形式が文の意味に対して、どのようなかわりを持っているのかという問題について検討をおこなった。

推量形式の検討からは、用法変化の要因が多様であることが、広義希望表現形式検討からは結果として同様の意味をあらわす形式であっても、当該の意味をあらわす背景にある論理は多様であり得ることが、それぞれあきらかになった。形式と意味の関係が一枚岩でなく、多様であることを再確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

解釈(現代語への翻訳)方法は分かっているが、なぜそれがあらわされるのかわかっていない表現に対して、形式が意味を表現の理路や経緯を検討することによって、その背景を明らかにすることができた。

形式と意味の関係を考えることは文法研究にとって(言語研究一般にとっても)重要な作業である。本研究は文次元の意味を考えることを通して、平板にとらえられがちが両者の関係の複雑さをあらためて確認したことになる。また、個々の形式に注目しながら、議論を進めることで、古代語の記述のさらなる精緻化にも貢献できたと考える。

研究成果の概要(英文)：Through an examination of the meanings of specific predicate forms-especially the conjecture and desired forms-, I have clarified how the predicate form is related to the meaning of the sentence.

The examination of conjecture forms reaffirms the diversity of factors contributing to usage change. And the examination of the forms of desired expressions clarified that the logic behind the expression of the meaning in question can be diverse. It reaffirmed that the relationship between form and meaning is not monolithic, but diverse.

研究分野：日本語学(文法史)

キーワード：古代日本語 推量表現 希望表現 形式と意味

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、古代語を対象に、述語形式 特に広義の叙法にかかわるもの の体系について考えてきており、話し手による事態の位置づけを重視したもので、上代語については、以下に示す(1)のような見通しを得ていた(仁科明 2016「上代の「らむ」 体系内の位置と用法」に示したものをもとに一部修正)。

1)

	現実 (過去及び現在)				非現実 (未来及び可能性)
	過去		現在		
	既確認	未確認	既確認	未確認	
確言	き・けり 連用形接続	けらし 連用形接続	ゑ／なり・みゆ	らし 終止形・連体形接続	べし・ましじ 終止形・連体形接続
想像	-	けむ 連用形接続	-	らむ 終止形・連体形接続	ず・む・まし・じ 未然形接続

(1)では、事態の存在する領域(現実/非現実)と話し手の述べ方という観点から述語が表す事態把握が整理されていることになる。述語が文全体に関わる意味を担い、文全体に関わる意味を話し手による事態把握に求めるような立場は、山田孝雄『日本文法論』(宝文館 1908)以来のものと言ってよく、伝統的なものの一つであろう。しかし、いくつか問題がある。

まず、そもそもの問題として、文全体に関わる意味が文の構成要素に過ぎない述語に担われているというのは、どういうことであろうか。述語文において、文を成り立たせる統覚作用が述語に担われるとする山田『日本文法論』などの議論に対して、森重敏(『日本文法の諸問題』笠間書院 1971 所収の「山田文法批判」など)が、文の線条性に依拠したための誤りとして批判していたことが思い出される。また、文全体に関わる意味がどのようなものか、ということも問題になろう。近年では、大木一夫『文論序説』(ひつじ書房 2017)が、話し手による行為・作用(判断作用や意向・要求表明)を文次元に属する意味として、述語の表す意味から切りはなす議論を行っている。述語において担われる文次元の意味とはどのようなものであり、どこまでが述語に担われていると考えられるのか、再考する必要があった。

また、(1)に示した述語形式によって、「時間性」(事態が過去・現在・未来のどこにあるか)、「確実性/不確実性」「証拠性(徴候性)」「話し手による希望」のような意味が表される(これらはすべて事態の内容に関わる意味である)。なぜ、このようなものが文次元の意味として存在するのだろうか。「む」などが典型だが、古代語では、一形式の中に認識系の意味と願望系の意味が共存することもある(これについては、尾上圭介『文法と意味Ⅰ』くろしお出版所収の一連の議論や、大木『文論序説』の議論もある)。研究代表者は、かつて一語文の表す意味の中に、時間性の分化を見たことがあり、近年も、このような問題を意識しつつ、一語文の問題を扱ってきたが、きちんと解明されたとは言いがたい。関係を考える必要があった。

また、述語形式の意味をどのようにとらえるか、という問題とも関わる論点だが、述語形式の表す意味を話し手(やその行為・作用)との関わりで考えようとする時、その述語形式が主文末以外で用いられた場合の意味が問題となる。述語が、従属節の述語となった場合、必ずしも話し手の今、ここ、私が基準とはならないことが知られている(野村剛史の「超越化」)し、ましてや行為的な意味の側面は感じられないのである。叙法に関わる述語形式の意味が、話し手(あるいはその行為的側面)と関わっているのだとしたら、このようなことが何故可能なのだろうか。あるいは、それらの述語形式が従属節述語となる場合、何が起っていると考えるべきなのだろうか。話し手の事態の位置づけから、叙法に関わる述語形式の意味を考える立場に立つことから、こうした問題を考える必要が生じていた。

2. 研究の目的

古代語の述語形式形式個々の共時的な用法の広がり、通時的な用法変化を考えることを通して、前項(1)のような古代語の述語体系を踏まえつつ、次のようなことを考えることを目指した。

- A) 述語形式があらわす文全体にかかわる意味を担っているように見える。述語形式が文全体にかかわる意味を担うのはなぜか。
- B) 述語形式が担う文全体にかかわる意味にはどのようなものがあり得るのか。そしてそれはなぜか。(1)のような体系と文法カテゴリーとのかかわりを考えることにもなる。)
- C) 文次元の意味の実現の理路にはどのようなものがあり得るのか(それは一様か)。

特に B)C)にこたえることによって、A)の問いにも見通しをえることを目的とした。

3. 研究の方法

前項に示したような問いに対しては、抽象的・理念的なかたちでこたえることも可能であろう。しかしながら、本研究では、あくまで個々の形式の用法の広がりやその通時的な展開・変化を考えることを通してこたえる方法を採用した。

以下の研究成果に即して述べる。まず、「らむ」(と競合する形式としての「らし」)の上代から中古にかけての用法変化を検討することを通して、変化が体系内での形式の対立関係によって説明することをこころみ、また、用法の変化には、個々の形式の性質や、体系内での位置によって説明される部分だけでなく、文体や表現内での流行のような要因がかかわることを示した(前項 B の問いに関連)。また、広義の希望表現については、個々の形式が「希望」をあらわす理路を検討していくことを通して、形式と(文次元の)意味のかかわりの多様性を確認しようとした(前項 C の問いに関連)。

4. 研究成果

2021 年度

今年度は、前年度からの継続課題として、古代語(特に上代語)の広義希望表現の検討をすすめた。

先行研究が指摘するように、叙法的な形式が存在することは間違いなく、係助詞の関与も指摘はできる。しかし、希望をあらわす理路にはさまざまなものがあって叙法形式には限定されず、一口に係助詞のかかわりといってももさまざまである。表現の背景を考慮するかたちでの整理をおこなった(主な「5 発表論文等・図書」2)として公表)。

文次元の意味の実現のあり方の多様性を確認することができたと考えている。文のあらわす意味の実現は多様であり、意味の実現の理路を考えることなしには、多様な形式(とそれぞれがあらわす意味)を考えることは困難である。近年では、通時的な研究を意識するためか、希望表現を扱う場合も、希望表現形式を平板に並べ、結果的な仕様特徴を比較する研究が多くなっているようである。このような研究状況に対しても問題提起をすることができたのではないかと考える。

また、公表には至らなかったが、コミュニケーションとのかかわり、述語の文法カテゴリの背景についても考察するなど、古代語の述語体系にかんする議論のブラッシュアップをすすめた。

2020 年度

今年度は、前年度にひきつづき、意味と形式のあり方を問題にする研究の一環として、次の二点に取り組んだ。

第一は認識判断系の述語形式(叙法形式)のあらわす用法の実現のあり方の検討(前年度の目標 2)からの継続課題)であり、第二は「(広義)希望表現」(事態の実現に関する主体の希望を何らかにあらわす表現をこのように呼ぶ)の希望表現実現のあり方に関する検討(前年度目標 3)~の継続課題)である。

一つ目の論点に関しては、中古の「らむ」と「らし」について、前年度に得た見通しにもとづき、新たな視点から調査し、考察を加えた。中古の「らむ」については、a)「現在推量」をあらわすという理解で問題がないように見える一方で、b)眼前の事態にかんする不信感・意外感をあらわすとされる用法 - 「静心なく花の散るらむ」タイプ - の増加が指摘されてきた。後者 2)の用法は上代にも指摘はできるものの、用例も少なく、(研究代表者自身のものをふくむ先行研究でも)かなり特殊なものと位置づけられるものであったが、三代集で用例が急増することもあって、注目を集めてきた。今年度の研究では中古の「らむ」の用法が現在未確認の事態の表現全般に広がったことを確認し、b)はあらわしにくくなるはずであること、b)の用法拡大と見える三代集での用例急増は、(佐伯梅友の議論に依拠しつつ、)作歌における和歌の構成理解の変化(誤解)とその一時的流行によると考えるべきものと結論づけた。この議論については論文化して公表することができた(主な「5 発表論文等・図書」1)として公表)。

二つ目の論点に関しても、前年度からひきつづいて、広義希望表現についての調査・検討をおこなった。こちらの点に関しては成果の公表には至らなかったが、公表に向けて議論の修正をすすめることができた。

2019 年度

年度当初に、当面の課題として以下の 3 つの研究課題を設定した。

- 1)上代・中古の「き」と「けり」の用法の検討を通して、形式間のすみわけの問題を解明する。
- 2)中古の「らむ」の用法の検討を通して、文法形式の用法のあり方の背景にある要因のさまざまを解明する。
- 3)上代の広義希望表現(希望・願望・意志・意向・命令・禁止などの総称)のさまざまの検討を

通して、文次元の意味のあり方の実現の多様性を確認する。

このうち、1)については、「き」「けり」の用法の収集と整理を行っていく過程で以前の研究で持っていた上代から中古にかけての変化の見通しについて、修正を行う必要が生じ、十分な成果をあげるに至らなかった。方向の修正に向けて、用例の再検討中である

2)については、これまでに行ってきた上代の「らし」と「らむ」に関する研究にもとづいて研究を進めた結果、まとまった結論を得ることができた。

3)については、これまでに見通しを得てきた、広義希望表現の意味実現のあり方の諸類型に関する見通しにもとづき、係助詞(終助詞)がかかわるタイプのものについて、用例の再整理を行った。

1)に関する修正と、3)に関する基礎作業に時間を採られた結果、1)~3)の研究課題のいずれについても、今年度中の成果の公表にはいたらなかったが、3つの課題のそれぞれについて、事実と知見を積み重ねることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 青木博史、小柳智一、吉田永弘（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 日本語文法史研究5（担当：「中古の「らむ」一体系変化と用法－」pp.99-122）	

1. 著者名 早稲田大学日本語学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集（担当：「希望表現における意味と形式：万葉集を例に」pp.33-48）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------